

# 一栄谷の 異見私見



昔の農業批判は

農業を単なる一産業としてしか理解せず、ひたすら市場原理をあてはめようとするもの、あるいは現場をまったく無視して教科書的に決めつけるもの等、正直なところ傾聴には値しないものが少なくない。一方で、足元からの批判には無類なきものが多く、特に若手農業者のそれには身を切られるようにつらいものもある。

山梨県のブドウ生産者であるO君は30歳ちょっと。大学へ行くために東京へ出たものの、卒業して実家に戻り、5代目としてブドウ生産に取り組みるとも、独自に新規就農者が地域に定着できるような条件作り・環境整備に取り組んでいく。

そのO君が嘆く一番が、地元で親の後継いで就農している同世代に困っている。多くは親から果樹園を引き継いでブドウを作っているものの、親がやってきたことと同じようにやるだけで、基本的なことについて勉強しようとしないう。他所を見てもない。そしていつも同じ人間と付き合うだけ。つまり世間は大きく変わ

てきているのに、穴倉に閉じこもってしまいい、穴倉から出ようとしなはかりか、穴倉の中が世界のすべてだと思ってしまうという。言い換えれば、勉強不足であるだけでなく、交流する範囲がごく限られ、持っている情報も乏しく、自らの判断によって選択していくというところがまったくできずにいる。そして何か問題が発生すれば、悪いのはAだ、という

## もう一つの 深刻な担い手問題

が彼らの常套句になってしまっているのが実情だという。また、とりあえずは就農せず、に増えている数少ない地域の職場である介護施設に勤める者もいるが、他に行くところなく介護を仕事にしているだけで、モチベーションに欠け、介護と言ふだけのまともな仕事にはなっていない。このようにせつなく若者がいても地域の力はほとんどなくなっている、と手厳しい。

これを何とかしなければならぬというのがO君の本心であるが、その悩みは深い。

若い就農者の確保については、筆者も含めて外部からの人材獲得に重点を置いて捉えてきたが、その裏に肝心の地元で育った後継者は当然に農業のプロとして育っていくものとの楽観があったことは否めない。外部からの人材の獲得ばかりでなく、後継者の育成にも本気で取り組まないと大変なことになりかねない、というのがO君が発する警鐘である。あらためて考えてみれば、地域に消防団があるとはいえコミュニティはどんどん希薄になってきており、特に相互に研鑽する場がなくなっている。よまだ、昔は若者宿とか若衆宿、漁村では畳の部屋といった若者たちが糧食をともにしながら地域の規律や社会のルールを学んでいく場があった。近代化ともない、こうした制度なり風習がなくなる一方で、個々バラバラになるだけで、これ代わるものが手当てされず、にきたと言わざるを得ない。ともすれば農業所得の増大ばかりが強調されるが、地域コミュニティを再生していくことが基本であり、この中で都市との交流や異業種との連携も含めて、若者たちが世界を広く、果敢に地域再生に向けて挑戦していくよう仕向けていくことが大課題のようだ。(農的社会学サイエンス研究所代表)